

## ちい坊

## 水島 さゆり

## 一

ちい坊「姉さん、今日何かあるの。」

姉「えゝあるのよ、今日はね、駒込の伯母様がいらつしやるの。」

ちい坊「ふん、そいでこんなにお座敷を綺麗にするんだね。」

姉「さうよ、駒込の伯母様は綺麗好きだから。」

ちい坊「なあんだ、つまらないや。」

母「まあ綺麗に片附きましたね。」

姉「お母様お馳走の方は出来まして？」

母「えゝ、もう出すばかりになつてゐます。」

ちい坊「僕 アイスクリーム三つ頂戴ね。」

姉「早くいらつしやればいゝわねえ、早く見たいわ。」

母「伯母様はお仕度が念入りだから、なか／＼でせう。」

姉「ほんとにおめかしやさんね。」

ちい坊「だから、おしやれ伯母様つてんだ。」

母「ちい坊、いけませんよ、そんな事言つて、さあつちへ行つて遊んでいらつしやい。」

ちい坊「ハイいだ。」

バタ／＼

女中「お坊ちやま、長靴をお穿きなさいまし。」

ちい坊「いやだあ、雨が降つてないからこれでい

よ。」

女中「だつて、そんな泥んこの中で遊びになつちやあ、お靴もおズボンも、だいなしちや御座いませんか。」

ちい坊「いいよ、長靴なんか穿いて泥こねは出来ないう。」

女中「お母様に申し上げますよ。」

ちい坊「申し上げます。」

プ、プー、プー。

女中「そらお越し。」

トンくくくくく。

姉「あらいやだ、あんな處に隠れたりして、ちい坊、お玄關でお迎へするのですよ。」

母「伯母様をおどかしたりしちやあ、いけませんよ。」

サクくくくく。

ちい坊「やつ。」

伯母「まあ、びつくりした。」

女中「あらつ、お坊ちやま、泥んこのお手で。」

姉「大變、伯母様のお召物に、ベツタリ着いたわ。」

伯母「あ、あー。」

母「どうしたらいいだらうねえ。」

## 二

母「お歸り遊ばせ。」

父「いや、どつこいしよ。」

母「お疲れでいらつしやいましよ、今日はおビールを冷して置きましたから、お召更が濟みましたら、召上つて頂きませう。」

父「そりやあ有難い、早速一杯貰はう。」

母「トクや、あのおビールの用意をしておくれ。」

女中「かしこまりました。」

ちい坊「やあ此のビール壺は冷つこいね。」

女中「いけません、あつちへ行つてお遊びなさいまし。」

ちい坊「いいよ、お父さんはまだ洋服を脱いだばかりだよ。」

母「トクや、お水とお手拭をお座敷の縁まで持つて来ておくれ。」

女中「はい。」

父「あゝせいゝした。どれ冷いのを一杯やらうか。」

ドシンゝゝゝゝ。

父「ちい坊はどうした。」

母「今しがた庭で遊んで居りましたが。」

ドクゝゝゝゝ。

母「おや。」

父「なあんだこれあ、あ、これ、醤油が出たぞ。」

母「まあ、おしたちで御座いますね、トクや、トクや。」

女中「ハイ、ハイ、ハイ。」

母「お前おしたちなんか差上げて、どうしたんだ

ね。」

女中「ひええ、おしたち、あのおビール壺から、

おしたちが？」

母「これ御覧。」

女中「ほんに、まあ、どうしたと言ふので御座いませうね。」

父「うんこれあちい坊だ。」

母「でも、あんまりひどう御座いますから。」

父「いや、あいつだよ。」

母「ちい坊、ちい坊、ちい坊は居ませんか。」

姉「今門の外へ駈出して行きましたよ。」

母「何て、いたづらでせうねえ。」

### 三

母「ほんとに叱驚なさいましたでせう。さう言ふいたづら振りで御座いますね。ほんとに困つてしまいました。あなたは子供の教育に経験を積んでいらつしやるから、何とか考へて頂きた

いものですね。」

園長「さう神経に病まない方が、よう御座ひますよ。」

母「私はもう、あの子のいたづらが氣に掛つて、いつそどちら様かへ頂かつて頂かうかと思ふ事もあります、どんなもので御座いませうね。」

園長「それはいけません。それは少々間違つて居りは致しませんか、我が兒は我手で育てないと罰があたるさうですよ。」

ちい坊「ヨイー／＼デツカンシヨ。」

園長「ちい坊さん、こんにちは。」

ちい坊「こんにちは。」

園長「あそびませう。」

ちい坊「うん、あすばう。」

園長「芝生でボール投しませう。」

ちい坊「フットボールがいいや。」

園長「よし來た。」

ポーン／＼／＼

ポーン／＼／＼

ポーン／＼／＼

園長「此のボールは大きいのね。」

ちい坊「大きなないよ、こんな小さいのは僕嫌ひだ。」

園長「これが小さいんですつて、へえ、ぢやあ、

ちい坊さんどれ位のがいゝの。」

ちい坊「僕ねえ、大きい、大きい地球位のがいいの。」

園長「ええつ、地球位の、ええー、そんな大きなボール何處で買ふの。」

ちい坊「賣つてなんか居ないよ、僕工夫して作るんだよ。」

園長「工夫して作る？ いやえらいわねえ。」

#### 四

ちい坊「ヒヨヒヨヒヨコ、小サナヒヨコ。」

園長「ヒヨヒヨヒヨコ、可愛イヒヨコ。」

ちい坊「知つてゐるの。」

園長「知つてますとも。ちい坊さんヒヨッコのお  
 嘶は御存じ？」

ちい坊「知らない。話してよ。」

園長「ヒヨッコがね、お母さんの雞に連れられて  
 一羽、二羽、三羽、四羽、五羽、六羽、六羽雞  
 小屋から表へ出ました。ヒヨッコの一羽がね、

『オンモは廣い。オンモは廣い。』つて駈けまし  
 た。すると、お母さんの雞がね、『駈けるところ  
 ぶよ、靜にお歩き。』と言ひました。一羽のヒヨ  
 ツコは、お母さんの脊中の上に乗つてね、『高い  
 〳。』と言つて喜びました。一羽はこぼれてゐ  
 る御飯粒を見附けて、『おいちい〳。』つて食べ  
 ました。一羽は、

ボツチャンオ出デ、

ジヨツチャンモ來ナ、

可愛イヒヨコト遊びマシヨ。

と歌ひました。他の一羽は、小さい羽をひろげ  
 て、帆掛船、帆掛船と言つてはしやぎました。  
 あとの一羽は、タララ、チララと自分で拍子を  
 とつてダンスをして浮かれました。丁度其の時  
 野良猫が、六羽のヒヨッコをとつて食はうと、  
 のそのそ近寄つて來ました。

お母さんの雞が吃驚仰天、コケツコツコと叫び  
 聲をたてました。可哀想に、六羽のヒヨッコは  
 もうすぐ野良猫に食はれてしまひます。

と其處へ、ボチがひよつくり出て來て、ウオー  
 とうなつて、野良猫をにらみつけました。野良  
 猫はこれは大變と思つて、こそ〳逃げて行つ  
 てしまひました。雞のお母さんと六羽のヒヨッ  
 コは、大喜び、萬歳、萬歳と言つて跳ねました。  
 ボチも、萬歳、萬歳と言つて喜びました。それ  
 でおしまひ。」

ちい坊「ね、僕がね、お母さんとね、町へ買物に行つたの、そしたらね、泥棒が出て來たの、そしてね、泥棒がね、お母さんと僕をつかまへようとしたの、さうするとね、お巡りさんが來たの、そしてね、コラッ、つて言つたの、するとね泥棒が逃げてつたの。僕とお母さんとね、萬歳萬歳つて言つたの。」

園長「面白いねえ、うまいねえ。ちい坊さんは奇想天外より落つですね。」

ちい坊「どうしたの、わかんないよ。」

園長「かう言ふヒョッコを他へ預けようなんて、さあお母さんの所へ行きますせう。」

